

# 杜甫詩との対比による李商隱詩の特質の考察

加 固 理 一 郎

## 序

李商隱（八一・二〇八五八）が杜甫（七一・二〇七七〇）の詩から影響を受けていることは古くから指摘されており、多くの先人がこの問題について論じている。筆者は先に「李商隱の詩歌に見られる杜甫詩の影響―『曲江』詩の『傷春』を中心に―」（中国文化学会『中国文化―研究と教育―』第七五号、二〇一七）でこれを論じた。本稿では、前稿で触れられなかった問題をさらに論じるとともに、杜甫詩と対比することで明らかになる李商隱詩の特質について示したい。

## 一、李商隱詩に対する杜甫詩の影響に関する言説

まず、李商隱詩に対する杜甫詩の影響に関する言説について概観する。これに関する現存する最古のままとした論述は、次に引用する宋、蔡居厚「蔡寬夫詩話」（魏慶

之『詩人玉屑』卷十七引）<sup>1</sup>の王安石の記事である。

王荊公晚年亦喜稱義山詩、以為唐人知学老杜而得其藩籬、惟義山一人而已。每誦其「雪嶺未帰天外使、松州猶駐殿前軍」「永憶江湖帰白髮、欲回天地入扁舟」与「池光不受月、暮氣欲沈山」「江海三年客、乾坤百戰場」之類、雖老杜亡以過也。（王荊公晚年亦義山の詩を喜び稱し、以て唐人老杜を学ぶを知りて其の藩籬を得たるは、惟義山一人のみと為す。毎に其の「雪嶺未だ帰らず天外の使、松州猶お駐む殿前の軍」「永く江湖を憶いて白髪にて帰り、天地を回らんと欲して扁舟に入る」と「池光月を受けず、暮氣山を沈めんと欲す」「江海に三年の客たりて、乾坤に百の戰場あり」の類とを誦せば、老杜と雖も以て過ぐる亡きなり。）

ここでは、李商隱の「杜工部蜀中離席」「安定城樓」「戲贈張書記」「夜飲」の詩から対句を抜き出して、これらが杜甫詩に匹敵するものだとしている。前近代に作ら

れた李商隱詩の注釈において杜甫詩の詩句との類似を指摘する注が多く載せられるのは、この王安石の記事を引き継いだものであろう。

近代に至ってもこのような評価は継承される。錢鍾書は、七言律詩の淵源に杜甫詩があることを論じた『談藝錄』五一<sup>(2)</sup>の文章の中で李商隱詩について次のように述べる。

然世所謂「杜様」者、乃指雄闊高渾、実大声弘、如「万里悲秋長作客、百年多病独登台」(中略)一類。山谷、後山諸公僅得法於杜律之韌瘦者、於此等暢酣飽滿之什、未多效仿。惟義山於杜、無所不学、七律亦能兼茲兩体。如「即日」之「重吟細把真無奈、已落猶開未放愁」、即杜「和裴迪」之「幸不折來傷歲暮、若為看去乱鄉愁」是也。而世所伝誦、乃其学杜雄亮諸聯、如「二月二日」之「万里憶帰元亮井、三年従事亜夫宮」、即杜「登高」之「万里悲秋常作客、百年多病独登台」是也。(然して世に所謂「杜様」とは、乃ち雄闊高渾にして、実は大に声は弘く、「万里秋を悲しみて長く客と作り、百年病多くして独り台に登る」の「中略」一類の如きを指す。山谷「黄庭堅」、後山「陳師道」の諸公僅かに法を杜律の韌瘦たる者に得、此等に於て暢酣飽滿の什は、未だ效仿するこ

と多からず。惟義山の杜に於けるや、学ばざる所無く、七律も亦能く茲の兩体を兼ねぬ。「即日」の「重吟細把して真に奈んとする無し、已に落つるも猶お開くも未だ愁いを放ぜず」の、即ち杜の「裴迪に和す」〔「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」の「幸いに折り来たりて歳暮を傷ましめず、若し為に看去らば郷愁を乱さん」の如きは是れなり。而して世に伝誦せらるる所は、乃ち其れ杜の雄亮たる諸聯に学び、「二月二日」の「万里帰るを憶う元亮の井に、三年事に従う亜夫の宮に」の、即ち杜の「登高」の「万里秋を悲しみて常に客と作り、百年病多くして独り台に登る」の如きは是れなり。〕

ここでは、李商隱が杜甫の七律の両面を継承していることが述べられる。このように、李商隱が杜甫詩から受けた影響は、主に修辭の面が注目されている。それについて次に呉調公の論<sup>(3)</sup>を引用する。

李商隱還學習了杜甫煉詞煉律的精髓。杜甫自「説過」「晚節漸於詩律細。」「詩律」不能僅僅理解為格律、更应包括謀篇布局、煉詞造句在內。「詩律細」實際也就是詩的肌理謹嚴精切的意思。密致当是李商隱詩歌的特色之一、而詩律精切則又是密致必不可少因素。对李商隱密致風格的形成來說、杜甫煉詞的傳統是起

了很大作用的。

ここでは、細密であることが李商隱詩の特色の第一であり、その成立は杜甫が詩句を練り上げることの影響が大きかったとしている。

しかし、はじめ李商隱自身が杜甫詩から学ぼうとしていたのは修辭の巧みさではなかった。それは政治や人倫に対する効用が重視される儒教的文学のあり方であった。それについて、自作の駢文作品集である「樊南甲集序」<sup>(4)</sup>には次のように述べられる。

樊南生十六能著才論、聖論、以古文出諸公間。後聯為鄆相国、華太守所憐、居門下時、勅定奏記、始通今体。(中略)十年京師、寒且餓。人或目曰、韓文杜詩、彭陽章檄、樊南窮凍。人或知之。(樊南生十六にして能く才論、聖論を著し、古文を以て諸公の間に出ず。後に聯なりて鄆相国、華太守の為に憐れまれ、門下に居りし時、奏記を勅定し、始めて今体に通ず。「中略」十年京師にて、寒え且つ餓う。人或いは目して曰わく、韓文杜詩、彭陽の章檄に、樊南窮凍せりと。人或いは之を知るか。)

これは、文学による政治参加を果たそうとして苦闘する状況を述べたものである。その時に学んだのは、「韓文杜詩、彭陽の章檄」すなわち韓愈の古文と杜甫の詩歌と

令狐楚の駢文による公用文である。

しかし、結局は儒教的文学における杜甫の創作意識を学び取ることではできなかったとされる。次に李商隱の政治詩を杜甫詩と対比した呉調公の論<sup>(5)</sup>を引用する。

当然、李商隱的沈鬱不同於杜甫的沈鬱。杜詩的沈鬱源於哀時撫事的憂憤、是涇洞風塵中一位絶頂熱腸的詩人憂国愛民的表现。(中略)李商隱徒然有杜甫的悲、而未能汲取杜甫詩篇中融成一气的壯。原因没有别的、他没有老杜的襟抱和器宇。他的悲愁往往停留在個人榮辱上、而不能提得更高。

李商隱にも政治詩はあるのだが、杜甫とは異なって私的な感情を述べるに止まるという。そのために、杜甫詩から学んだものは修辭の巧みさのみとされるのである。ただし、儒教による伝統的な文学観では「文質彬彬」と言われるように、内容と修辭の調和を重視し、それらを切り離して評価はできない。そこで、儒教的文学である政治詩においては、内容を効果的に伝えるための修辭技巧を李商隱は杜甫から学び得たのだろうか。次にこれを検討したい。

## 二、政治詩における修辞技巧

ここで取り上げる李商隱の詩は「行次西郊作一百韻」詩<sup>(6)</sup>である。彼が遭遇した最も重大な政治的事件が甘露の変である。これは、文宗の大和九年(八三五)に起こった宮廷クーデター事件である。この事件をめぐって、多くの政治詩が作られる。その中のひとつがこの詩である。これは甘露の変を発端とする内乱後の長安近郊の農村の荒廃を描いた作品である。まずはこの詩に対する清、何焯『義門読書記』第五八卷<sup>(7)</sup>の評を引用する。

此等傑作、可称詩史。当与少陵「北征」並伝。(此等の傑作は、詩史と称すべし。当に少陵の「北征」と並び伝うべし。)

杜甫の「北征」詩は、肅宗の行在所のある鳳翔から家族の暮らす邠州への旅を描く。その内容は、旅の途上で見聞した安史の乱の傷跡の残る農村の描写と、国家の政策に対する意見である。李商隱の「行次西郊作一百韻」詩も確かにそれと同様の内容だが、それを表現する構成が異なっている。「北征」詩は全体が作者自身の発話であり、上記の内容はすべて一人称で語られる。それに対して「行次西郊作一百韻」詩は、始めの十八句と終わりの十句だけが作者自身の発話で、その中間は作者の問いか

けに答えた農民の言葉の記述となっている。次にこの詩の中から、第十七句から第二十二句の作者の問いに農民が答え始める部分を引用する。

始若畏人問 始め人の問うを畏るるがときも  
及門還具陳 門に及びて還た具さに陳ぶ  
右輔田疇薄 右輔は田疇薄く  
斯民嘗苦貧 斯の民嘗て貧に苦しむ  
伊昔称樂土 伊の昔樂土と称し  
所頼牧伯仁 頼る所は牧伯の仁なり

ここでの農民の言葉は、「伊の昔」とあるように歴史的状況の叙述から始まる。そして、次に引用する第三十一句から後は、唐の初めから開元天寶を経て甘露の変までの宮廷政治についての論述が続く。

況自貞觀後 況んや貞觀より後  
命官多儒臣 官に命ぜらるるは儒臣多し  
例以賢牧伯 例として賢牧伯を以て  
徵入司陶鈞 徵し入れて陶鈞を司らしむ  
そしてようやく次に引用する第百五十九句から後になって、農民は戦乱に遭った農村の状況を述べる。

鳳翔三百里 鳳翔三百里  
兵馬如黃巾 兵馬黃巾のごとし  
夜半軍牒來 夜半に軍牒來たりて

屯兵万五千 兵の万五千を屯す

その中でも強い印象を与えるのは、次に引用する避難民が子どもを棄てて何とも思わない人間性の喪失の極みを描いた部分であろう。

郷里駭供億 郷里は供億に駭き

老少相扳牽 老少相扳牽す

児孫生未孩 児孫生まれて未だ孩ならざるに

棄之無慘顔 之を棄てて慘顔無し

不復議所適 復適く所を議せず

但欲死山間 但だ山間に死せんと欲す

また、次に引用する部分では、盗賊だけでなく官軍までもが民衆を襲う状況が述べられており、時世の批判として意義深い。

官健腰佩弓 官健は腰に弓を佩し

自言為官巡 自ら言う官の為に巡ると

常恐值荒迴 常に恐る荒迴に値らば

此輩還射人 此の輩還つて人を射るを

これらの部分は確かに「詩史」としての価値があるだろう。しかし、それは長々とした朝廷の政治に対する談義の後に置かれるため、目立たなくなっている。

諷諭を旨とする儒教的文学では、作中に民衆を登場させ、その言葉や態度によって政治に対する意見を示すこ

とがある。その例は杜甫詩にもいくつか見られる。「行次西郊作一百韻」詩でもその表現技法が用いられているが、農民の語りの構成に問題があるため効果的でない。これを次に引用する杜甫の「兵車行」(8)と比べると違いは明らかである。

道旁過者問行人 道旁の過ぐる者行人に問えば

行人但云点行頻 行人但だ云う点行頻りなり

或從十五北防河 或いは十五より北河を防ぎ

便至四十四宮田 便ち四十に至りて西田を営む

去時里正与裏頭 去く時里正たもと頭を裏み

婦来頭白還戍辺 婦り来たれば頭白くして還辺を成る

辺庭流血成海水 辺庭の流血海水を成すも

武皇開辺意未已 武皇辺を開き意未だ已まず

君不聞漢家山東二百州 君聞かずや漢家山東の二百州

千村万落生荆杞 千村万落生荆杞を生ず

「兵車行」では、兵士の語りは「行人但云点行頻」という個人的な境遇からはじめられる。そして、その後「辺庭流血成海水、武皇開辺意未已」から、兵士の語りとも地の文とも受け取れる形で国家全体の状況が述べられる。これは「行次西郊作一百韻」詩の構成と前後が逆になっている。「兵車行」では、この構成によって具体的に伝えられた一人の民衆の境遇が国家全体で普遍的なもの

であるのが示されている。このような効果は、「行次西郊作一百韻」詩には見られない。

筆者は以前、「李商隱の政治詩―『行次西郊作一百韻』を中心にして―」（中国文化学会『中国文化―研究と教育―』第六七号、二〇〇九）で李商隱の政治詩について論じている。そこで、「行次西郊作一百韻」詩では、大局的な政治論の展開が最も重視されていると述べた。そうだとすると、むしろ杜甫の「北征」詩に依拠して作者の一人称で通したほうが効果的な構成になっただろう。

すなわち、李商隱は民衆の言葉借りて政治的主張をする表現技法を杜甫詩から学んでいるが、その効果的な使用方法までは理解できていなかったということになる。

このように、修辭の面でも、李商隱は杜甫詩から儒教的文学のあり方を十分に学び取れなかったのである。

### 三、杜甫とは異なる李商隱の詩人としての資質

しかし、李商隱は杜甫詩に真摯に向き合って政治詩を制作した結果、杜甫とは違う自分自身の詩人としての資質を見いだした。これも広い意味で李商隱の創作に対する杜甫詩の影響と言える。これを筆者は本稿の冒頭で示した前稿で述べた。その内容を以下にまとめておく。

ここで主に扱った「曲江」詩<sup>(9)</sup>は、長安城内の遊園である曲江の情景に安史の乱と甘露の変を重ね合わせて詠んだものとされる。そして、この詩は杜甫の詩との類似が指摘されているが、特に注目されているのは、次に引用する結びの句の「傷春」の語である。

天荒地変心雖折 天荒地変し心折ると雖も  
若比傷春意未多 若し春を傷むに比ぶれば意未だ多

からず

この「傷春」は様々に解釈されている。それは、この語が多様な意味を付加されて詩歌に広く用いられていることによる。それらの中でこの詩と同じく動乱の中の春の思いを述べたものは、杜甫の「傷春」五首の詩<sup>(10)</sup>が現存する最初の例である。その第一首の初めを引用する。

天下兵雖滿 天下に兵満つと雖も  
春光日自濃 春光日々に自ら濃やかなり

この詩では、ここから繰り返し人間界の混乱と規則正しい自然の巡りとが対比される。

次に第五首の結びを引用する。

春色生烽燧 春色烽燧に生じ  
幽人泣薜蘿 幽人薜蘿に泣く  
君臣重修徳 君臣重ねて徳を修めなば  
猶足見時和 猶お足らん時の和するを見るに

ここでは、天人相関の考え方によって人間界にも自然界と同じ秩序がもたらされるべきだとされる。

李商隱の「曲江」詩でも、戦乱による人間社会の変転と自然界での春景色の移り変わりが対比される。そこで杜甫詩と異なっているのは、人間社会よりも自然のほうへと心を傾けたまま終わることである。その理由を他の李商隱詩を参照して考えるに、春景色には美しさがあるために愛惜の思いがより深まるということになる。

「曲江」詩は、甘露の変での長安の荒れはてたさまを目の当たりにした深刻な状況で作られた。そこで、同じような状況に置かれた杜甫詩を真摯に受け止めて自分の思いを語ろうとした結果、意図せずに杜甫とは違う自分の資質を見いだした。このように、この詩の制作は、後世には唯美的などと評される李商隱の詩風が確立する契機のひとつとなったと考えられる。

以上が前稿の内容である。本稿では、これに以下のことを付け加えたい。「曲江」は深刻な状況で作られた詩である。それに対して次に引用する「杜工部蜀中離席」詩<sup>(11)</sup>は、遊戯的な作品の中で杜甫とは異なる個性を意図的に發揮したものである。

人生何処不離群 人生何れの処にか群れを離れざらん  
世路干戈惜暫分 世路干戈暫く分るるを惜しむ

雪嶺未帰天外使 雪嶺未だ帰らず天外の使

松州猶駐殿前軍 松州猶お駐む殿前の軍

座中醉客延醒客 座中の醉客醒を延き

江上晴雲雜雨雲 江上の晴雲雨雲を雜う

美酒成都堪送老 美酒成都老を送るに堪う

當壚仍是卓文君 壚に当るは仍お是れ卓文君

この詩は、題からすると、杜甫の詩を模擬して蜀の地で席を離れるという状況を詠んだ、というものである。詩の内容は戦乱の世の中の別れの宴会に加わって快く醉えない様子である。このような状況も杜甫の詩に見られ、摸擬の作にふさわしい設定である。そして、先に示したように、王安石はこの詩の第三・四句の対句を杜甫に匹敵するものだとしていると考えられる。

さらに、清の馮浩はこの対句を次に引用する杜甫の「嚴公序宴同詠蜀道画図、得空字（嚴公の序宴に同に蜀道の画図を詠ず、空の字を得たり）」詩<sup>(12)</sup>の「松州雪嶺東」に依っていると指摘する<sup>(13)</sup>。この杜甫詩は、全体の構成においても「杜工部蜀中離席」詩に類似しているため、両者を対比することで李商隱詩の杜甫詩とは異なる個性を明らかにすることができるだろう。

日臨公館静 日臨みて公館静かに  
画滿地図雄 画滿ちて地図雄なり

劍閣星橋北 劍閣星橋の北

松州雪嶺東 松州雪嶺の東

華夷山不斷 華夷山断えず

吳蜀水相通 吳蜀水相通ず

興与煙霞會 興煙霞と會し

清樽幸不空 清樽幸いに空しからず

これもまた宴席の詩である。穏やかな情緒の詩であるが、「松州雪嶺東」と対になる「華夷山不斷」には、国境では異民族との緊張が続いているのが暗示されている。そのような状況でも成都の嚴武のもとでは酒宴を楽しむことができるのを、結びの「清樽幸不空」で表す。李商隱の「杜工部蜀中離席」詩の第七句「美酒成都堪送老」も、これと同じような心情を表現するものである。しかし、それに続く「当壚仍是卓文君」で美酒とともに美女を登場させ、艶麗さを加えるのが杜甫とは異なる。これは、杜甫詩の摸擬作の最後に至って、「曲江」詩の制作で見いだした自分の個性を意図的に表したのではないかと思われる。

#### 四、杜甫詩と李商隱詩の修辭の違い

以上に述べたように、李商隱は杜甫詩を学びつつもそれとは異なる詩風を確立する。ここにおいて内容と修辭の關係が李商隱詩は杜甫詩とは異なったものになったと思われる。最後にこのことについて論じる。

伝統的文学観では、先に述べたように「文質彬彬」として内容と修辭が調和していることを重視する。ただし、内容と修辭は並立するものではない。例えば「文選」であるが、蕭統の「文選序」には、讚・論・序・述の中にも「沈思」から生まれて「翰藻」に帰しているものは文学作品と見なし得るとする。この「沈思」と「翰藻」の關係について大上正美は「人生の現実に裏うちされた作者の思想感情より表出され、しかもそれが表現として自立してこそ、真の文学作品と呼んでしかるべきものだ、と言っている」とみなしうる。<sup>(14)</sup>とする。杜甫詩の場合にも、このような内容と修辭の關係が成り立つ。一方、李商隱詩はそうではない。

李商隱の詩歌について論じ、杜甫詩の影響に言及している先行研究のひとつに、松岡秀明の「李義山の『晚晴』詩について」(東京経済大学『人文自然科学論集』第七四号、一九八六)がある。松岡は、李商隱が夕暮れになっ



て晴天になることである。「晚晴」を詠んだ詩の淵源には杜甫詩があるとす。そして、杜甫と李商隱の「晚晴」を題とする詩を対比する。

まずは杜甫の「晚晴」詩<sup>(15)</sup>を引用する。

村晚驚風度 村晩れて驚風度り

庭幽過雨霑 庭幽かにして過雨霑す

夕陽薰細草 夕陽は細草を薫らせ

江色映疏簾 江色は疏簾に映す

書乱誰能帙 書乱れて誰か能く帙せん

杯乾白可添 杯乾きて自ら添うべし

時間有餘論 時に聞く餘論有るを

未怪老夫潜 未だ怪しまず老夫の潜むを

次に李商隱の「晚晴」詩<sup>(16)</sup>を引用する。

深居俯夾城 深居して夾城に俯し

春去夏猶清 春去りて夏猶お清し

天意憐幽草 天意幽草を憐れみ

人間重晚晴 人間晚晴を重んず

併添高閣迴 併せて高閣に添いて廻かにして

微注小窓明 微かに小窓に注ぎて明らかなり

越鳥巢乾後 越鳥巢乾く後

扁飛体更輕 扁り飛びて体更に輕し

この両者を対比して松岡は次のように論じる。

この詩の最も美しくしかも凝縮された描写、そこに集中する杜甫の創造力が見られるのが第一聯である。

(中略) この詩の中で考えれば、杜甫の余裕ある精神的態度も、この「夕陽」の包み込む時空に支えられていよう。そして、李義山の詩句とこの二句は「光」

の描写として極めて通じ合うものがある。もとより、

杜甫の「光」は詩全体には広がらず、「光」への注視

は、第二聯に止まっているが、李義山は、この「光」

によりかかってゆく。その詩に、抽象化された「人

間」はあっても、「時世」などない。一人で「光」と

向きあう。それは、楽遊原の上で、西方に向って、

沈みつつある「夕陽」を浴びていたのと同じである。

それが、杜甫と異なる「晚唐」の詩人たるゆえんで

ある。(一七〇八頁)

杜甫の「晚晴」詩の主題は、民衆の中に溶け込んで穩

やかに暮らす作者自身の生活の様相である。そして晚晴

の光はその生活のさまを彩る舞台照明の役割を果たして

いる。すなわち、人間のあり方をその内容として、それ

を効果的に伝えるために繊細な光の描写を修辞として用

いるものである。この詩は杜甫詩の中でも儒教的精神が

薄い、このような内容と修辞の関係においてはやはり

中国古典文学の正統に属すると言える。

それに対して、李商隱の「晚晴」詩では人間の姿はほとんど描かれない。松岡が指摘するように、詩全体で光が表現されている。そして、その光の表現は李商隱の夕陽の光への愛着を基盤とするものとされる。つまり、杜甫が修辭に用いる光の描写は、李商隱にとっては主題とするにふさわしいものとして扱われるのである。

この「晚晴」詩の例と類似した対比が、杜甫の「月夜」詩と李商隱の「夜雨寄北」詩でも成り立つことを、次に示したい。この両作品には「晚晴」詩とは異なって直接的な影響関係があったかどうかは定かではない。しかし、この両作品の対比によって、李商隱の修辭に対する意識がより鮮明になるのである。

まず杜甫「月夜」詩<sup>(17)</sup>を引用する。

今夜鄜州月 今夜鄜州の月

閨中只独看 閨中只独り看るならん

遥憐小兒女 遥かに憐れむ小兒女の

未解憶長安 未だ長安を憶うを解せざるを

香霧雲鬢湿 香霧雲鬢湿い

清輝玉臂寒 清輝玉臂寒からん

何時倚虚幌 何れの時か虚幌に倚りて

双照涙痕乾 双び照らされて涙痕乾かん

次に李商隱「夜雨寄北」詩<sup>(18)</sup>を引用する。

君問婦期未有期 君は婦期を問うも未だ期有らず  
巴山夜雨漲秋池 巴山の夜雨秋池に漲る

何当共剪西窓燭 何まよか共に共に西窓の燭を剪りて

却話巴山夜雨時 却まよって話すべし巴山夜雨の時を

この両者の詩では、未来の予期と過去の追想によって、異なる時間が心の中で重なり合う表現がなされている。

杜甫「月夜」詩の結びの二句は、未来のいつか妻と再会できたその時を思ったものである。そして、夫婦が双び照らされる未来の月は、その時には過去となっている現在において「独り看」ている月と対応する。さらに、「涙痕乾かん」の涙は、未来の再会を喜ぶ涙であるとともに、現在の別離の間に流されている涙ともとれる。

一方、李商隱「夜雨寄北」詩では、第三・四句で、未来のある時点で北方の地で待つ人の元へと帰れたならば、その時には過去となっている現在の巴山に降る夜の雨のことを話そうと語っている<sup>(19)</sup>。

しかし、両者の時間表現は作品中で占める位置が違う。「月夜」詩では妻に対する愛情が主題である。そして、その主題に沿って再会の時を待ち望む思いを強く訴えるための修辭として、この時間の重なり合いの表現が用いられる。ここでもやはり、杜甫は人間の心のあり方を詩の内容として、それを効果的に伝えるために修辭を用いる

のである。

これに対して、「夜雨寄北」詩は時間表現が作品のほとんどを占めている。すなわち、第一句には「帰期」が繰り返されていくが、これは第三・四句に述べられた再会の時なのである。そして第二句と第四句では今の状況を表す「巴山夜雨」が繰り返される。このように、四句すべてが時間の重なり合いを表現するために使われる。そのため、北方の地で待つ人と作者がどのような関係にあるのか、作者はその人物にどのような感情を抱いているのか、第三者である読者には明確に伝わらない。伝えられるのは時間の重なり合いの巧みな修辞だけなのである。このような作品が代表作とされることから、李商隱の詩歌は修辞だけが重んぜられて内容空疎だとされる。しかし、この詩の時間表現の修辞は、杜甫「月夜」詩と比べ、読者に伝えるものが違うのではないか。

李商隱の詩歌には「夜雨寄北」をはじめとして、異なる時間が心の中で一つに重なり合う状態を表現したものがある。筆者は「李商隱の詩歌と仏教―時空認識と典故表現について―」（中国文化学会『中国文化―研究と教育―』第七四号、二〇一六）において、そこに仏教による時空認識が関わっている可能性があるのを論じた。

この旧稿の要点を述べておく。仏典を引用して構成さ

れた李商隱詩には、日常的な感覚による尺度を越えた極大、極小の時間と空間について言うものが多い。その中でも「題僧壁」詩<sup>(20)</sup>は、仏教による時空認識そのものを主題とする。その第三句から第六句を次に引用する。

大去便応欺粟顆 大にしては便ち応に粟顆を欺くべし  
小来兼可隱針鋒 小にしては兼ねて針鋒を隠すべし

蚌胎未滿思新桂 蚌胎未だ満たずして新桂を思い

琥珀初成憶旧松 琥珀初めて成りて旧松を憶う

この詩の第三・四句の対句は、「粟顆」「針鋒」の仏典に使われた事物を用いて、空間の大小は人間の主観によることを表す。そして、第五・六句は、過去・現在・未来の時間は因果関係を認めることのできる人間の心の中にだけ存在していることを表す<sup>(21)</sup>。さらにこの第五・六句では、第三・四句と異なって、仏典中の語ではなく李商隱の他の詩歌にも用いられる好みの題材である月の満ち欠けに合わせて育つ「蚌胎」と月中の「桂」を用い、それに「琥珀」と「松」を配して対句を作っている。このように、仏教の哲理と美的な詩歌の言語表現を結び付けていることが、他の唐代の仏教に心を寄せる詩人とは異なっている。一方、李商隱の詩歌には、「夜雨寄北」詩のように、異なる時間の重なり合いの表現がいくつかの作品で見られる。そしてさらに、彼の特異な典故表現も

これに通じるものと理解できる。このような表現を自覚的に用いる契機のひとつとして、仏教の哲理による時空認識を得たことがある。以上が旧稿の内容である。この論が成り立つならば、「夜雨寄北」詩で修辞が突出しているのは、そこに表された時空の様相が仏典とは関わりない日常の一場面でも感じ取ることができのを伝えようとしたためだとも考えられる。

## 五、結び

李商隱が杜甫詩の修辞を真剣に学んだことは確かである。しかし、政治や人倫に有用であることを重視する儒教的文学にふさわしい修辞を杜甫から継承することはなかった。そしてむしろ、この学習を通じて杜甫とは違う自分の詩風を確立するに至るのである。この違いが生じたのは、李商隱と杜甫では詩歌における内容と修辞の關係に対する意識が異なっていたためではないかと思われる。李商隱詩は修辞主義的と評されることがある。これは、正統の中国古典文学において内容と修辞が調和しているのに対して、修辞を過度に重んじていることを貶めた語である。しかし、李商隱詩における修辞の偏重は、正しくひとつの主義主張として捉えるべきであろう。

そのことは、李商隱詩の読み方にも関わる。杜甫詩のような正統の中国古典詩ならば、修辞を用いて表現された内容が何なのかを作者の置かれた状況も踏まえて追求するのが、作品の解釈である。しかし、李商隱詩の場合、それを行っても多様な解釈が発生して収拾がつかなくなるものが多い。このような李商隱詩に対しては、修辞そのものが持つ意味と向きあうような読み方もまた求められるのである。

## 注

- (1) 『詩人玉屑』(上海古籍出版社排印本、一九七八、三六一二頁)
- (2) 初出は一九四八年。引用は『談藝錄・補訂重排本』(生活・読書・新知三聯書店、二〇〇一、五三三―四頁)による。
- (3) 『李商隱研究』(上海古籍出版社、一九八二)第七章、四、李商隱所受杜甫的影響、一七七頁
- (4) 劉学鍇・余恕誠『李商隱文編年校注』(中華書局、二〇〇二)一七二三頁
- (5) 前出、一七六頁
- (6) 李商隱詩の底本は劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解(増訂重排本)』(中華書局、二〇〇四)とする。

「行次西郊作一百韻」詩は二五三～六頁

- (7) 『義門読書記』第五八卷（中華書局排印本、一九八七、一二七二頁）

- (8) 杜甫詩の底本は、清、仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局排印本、一九七九）とする。「兵車行」は卷二、一一三～六頁

- (9) 底本一四八頁

- (10) 底本卷十三、一〇八一～五頁

- (11) 底本一二七八頁

- (12) 底本卷十一、九〇五頁

- (13) 『玉溪生詩集箋注』卷二、上海古籍出版社排印本、一九七九、三六二頁

- (14) 「蕭統と蕭綱——『文選』と『玉台新詠』の編纂を支える文学認識」九一頁（伊藤虎丸・横山伊勢雄編『中国の文学論』汲古書院、一九八七）

- (15) 底本卷十、八一四～五頁

- (16) 底本六八六頁

- (17) 底本卷四、三〇九頁

- (18) 底本一三五五頁

- (19) 「夜雨寄北」詩の時間表現については、黄欣卉「李商隱詩歌時空審美意象解讀」（湖南城市学院『城市學刊』第三七卷第三期、二〇一六年）に触れられ

ている。

- (20) 底本一四二三頁

- (21) 「題僧壁」詩に見られる仏教による時空認識については、吳言生「論李商隱詩歌的仏学意趣」（『文学遺産』一九九九年三号）、梁桂芳「李商隱与仏教」（『貴州大学学报（社会科学版）』第二一卷第五期、二〇〇三年）に触れられている。

（本学教授）

## 文楽鑑賞教室

人形浄瑠璃と聞いてどのような言葉を思い浮かべるだろうか、正直言って私は、近松門左衛が書いた「曾根崎心中」しか思い浮かばなかった。しかも、知識として入っているのはその言葉だけであって、人形浄瑠璃がどのようなものであるかが全く見当もつかなかった。

人形浄瑠璃はその名の通り、人形を使った劇のようなものであった。人形の仕組みが面白く、三人で一体の人形を動かす。一人は頭と右手、もう一人は左手、最後の一人は足をつかさどっている。この三人で協力する、というのがとても難しい。三人で人形をうまく操り、一つの動作を成すというのは三人の阿吽の呼吸でやっとなせる業なのである。また、人形の声は、人形を操っている人とは別の人が出すのだが、一人の人がいろいろな役の声を出すのである。その声色が演じる役によって、変化する。それも面白い。

日本の古典芸能ということもあり、難しいイメージがあったが、いつの間にか物語に引き込まれていた。伝統芸能の「面白さ」というのを感じる休日はいかがだろうか。

(国語三年 狩谷 良南)